

[研究ノート]

英語語彙における二重語の意味の差異化 (第2回)

ギリシア語起源(2)

安 達 一 美

語の意味は、時代の経過とともに、しばしば変化します。その結果として、現在の意味が原義からずいぶん離れてしまうこともあります。しかし、語源の探求はその語をより深く理解するのに、とても重要で効果的な方法といえます。たとえば、同一語源の語を数回にわたって借入することで生じた英語の二重語が、現在異なる形態と異なる意味をもつ語として使われているとしても、語源をたどり、根底の意味や意味変化の過程を知ることによって、一組の語として深く理解することができるのです。と同時に、英語に入ってくるまでの二重語の遍歴を研究することで、英語がさまざまな民族と出会ってどのように文化を吸収していったか、まさに、壮大なヨーロッパ文化の接触史を目の当たりに見ることもできます。語彙史の研究は、積み木を一つ一つ積み上げていく気の遠くなるような作業です。しかし、その過程にはwonderに出会える喜びもあります。

今回も、前回に引き続きギリシア語起源の二重語の意味がどのように差異化されていったか見ていきましょう。

1. anthem (n. 祝歌、国歌) vs. antiphon (n. 応答頌歌)

anthemは、国歌 (national anthem) の意味で一般的に用いられているが、これはもともと、「聖書の語句を用いた交唱聖歌、祝歌」を意味し、antiphon「(教会の) 交唱聖歌」と二重語である。語源はギリシア語 *ἀντίφωνα* で、形容詞 *ἀντίφωνος* の中性複数形である。この形容詞は、接頭辞 *ἀντί* 「返報として」と *φωνή* 「音声、音」の形容詞 *φωνος* が組み合わされて、「(音が) 応えて響く」を意味する。anthemは、*ἀντίφωνα* が後期ラテン語に *antiphōna* 「(教会の) 応答頌歌」として取り入れられ、初期ロマンス語の **antéfena*, **antéfna* を経て、古英語期に *antefne* 「交唱聖歌」で借入されている。

anthemの-th-は、16世紀にギリシア語起源の語をギリシア語式の綴りに過

度に復活させようしたために生じた。また、民間語源でhymnと関係付けられてantihymnからant'hymnへの変化も考えられると研究社の『語源辞典』は指摘している。national anthemは正確にはhymnであることが多く、例えば、フランスの国歌である*le Marseillaise*は、*l'hymne national français*のことである。

初期のanthemは伴奏を伴わない合唱曲であり、司祭と聖歌隊との間、二人のソリストの間、または二つの聖歌隊の間での交唱聖歌であった。15世紀になるとverse anthemと呼ばれるオルガンなどの伴奏を伴って独唱部と合唱部の二つのグループが反響しあったり、交互に歌ったりする交唱聖歌が発達する。16世紀に、イギリス国教会の主要言語がラテン語から英語になったため、英語のanthemが登場する。そして、意味の一般化によって、聖歌隊のために作られた楽曲である「賛美歌」や「宗教的な歌」を指すようになる。一般的には宗教的・道徳的な意味合いの内容で、典礼で歌われたり朝の祈りや夕べの祈りの結びとして用いられたりした。詩では、喜びや讃美の「歌」を意味するようになる。シェイクスピアは*Two Gentlemen of Verona*（『ヴェローナの二紳士』）の第3幕第1場で、Valentineの台詞に用いている。

If so, I pray thee, breathe it in mine ear,

As ending anthem of my endless dolour.

「もしその魔力があるなら、おれの耳に吹きこんでくれ

はてしない悲しみを終わらせる最後の賛美歌として」(小田島雄志訳)

(下線は筆者、以下同様)

またJohn Keatsは*Ode to a Nightingale* 第8スタンザにおいて、次のように詠っている。

Adieu! adieu! thy plaintive anthem fades

Past the near meadows, over the still stream

Up the hill-side; and now 'tis buried deep

In the next valley-glades:

「さらば、お別れだ！お前の歎きの歌は

近みの牧場を過ぎ、静かな流れを越え、

丘の山腹をのぼって遠ざかってゆき、

そしていま隣の谷の空き地に深く埋められてしまった。」(小川和夫訳)

19世紀初めごろから、anthemが国の音楽的な象徴として使われるようになり、国旗などと同じような意味合いを持つようになる。最も古いnational anthemはイギリスの*God Save the King*で、最初に演奏されたのは1745年と記録されている。19世紀になってNational AnthemとかRoyal Anthemと呼ばれるようになる。1866年に書かれたCarl Engelの*Introduction to the study of national music*には“National Anthem”の注として“Anthem is musically an inappropriated title for this tune. It has, however, now been so generally adopted that it would be pedantic not to use it.”(この曲のタイトルとしてAnthemというのは、音楽的に適切ではない。しかし、今や一般的にそう呼ぶことが受け入れられているから、Anthemの語を使わないのはかえって学者ぶっている感があるだろう。)と記されている。

antiphonは、anthemが語源的意味を薄めていった15世紀末から16世紀初めごろに、中期フランス語*antiphone*を経由してか、または後期ラテン語*antiphōna*から直接、原義を保持した「(教会の) 交唱聖歌」で再度借入された。17世紀に「応答、反応」の意味が加わった。ちなみに「交響曲」のsymphonyはギリシア語起源で*σύν*と*φωνος*からできた*σύμφωνος*が語源で「共に響く、こだまする、調和する」の意味である。英語の接頭辞antiとsynの意味の違いを理解するのにいい例であろう。*σύμφωνος*はラテン語を経由してsymphonia「(音の) 調和、協和音、器楽」の意味となり、英語には14世紀に「楽器」の意味で入り18世紀に「交響曲」となっていく。

2. chorus (n. コーラス) vs. choir / quire (n. 聖歌隊)

chorusとchoir/quireの語源はギリシア語*χορός*で「踊り」「(宗教的行事としての) 歌舞」「(特に劇の構成要素としての) 合唱舞踊(隊)」を意味していた。古代ギリシア演劇にとってchorusは重要な構成要素であった。アテナイの悲劇や喜劇は、僭主時代の統治者ペイストラトスが地方の酒神祭を「大ディオニシア祭」という国家行事としたことから始まり、のち高度に発達した。劇の合唱隊であるコロスは、劇場のorchestra「舞踏の場」で、通常、悲劇やサティロス劇で12人、喜劇で24人が方形の隊列を組んで踊り歌った。当時は合唱隊と俳優は同じ平面で演じ、いずれも男性が仮面をつけて登場した。コロスは物語の転換を注視し、劇中の時代ではなく観劇の立場で判

断する役を担ったり、本筋とは関わりなく作者の主張を観客に向けて訴えたりする役を担ったりした。しかし、やがて合唱隊は幕間の音楽の担い手となっていく。

ギリシア語 $\chi\omicron\rho\omicron\varsigma$ がラテン語に入り $chorus$ 「歌舞隊、輪舞」となる。そして、中世ラテン語では教会の「聖歌隊」の意味へと変わっていく。英語 $choir$ は、古フランス語 $cuer$ 「教会の聖歌隊」を経由して取り入れられる。 $cuer$ は現代フランス語では $chœur$ であり、英語の $chorus$ と $choir$ の両方の意味を持っている。

$choir$ は13世紀末から14世紀初めにかけて、「聖歌隊席、内陣」の意味や、現在の $chapter$ とほぼ同じ意味の大聖堂や共住聖職者団聖堂（ $collegiate\ church$ ）における「大聖堂参事会」の意味で借入された。しかし、15世紀の終わりごろに $chapter$ が「大聖堂参事会」の意味を担うようになって、 $choir$ のその意味は16世紀後半には廃れていく。そして、14世紀後半に大聖堂の「聖歌隊」の意味が加わり、一般的な教会の「聖歌隊」を指すようになる。

通例、大聖堂の聖歌隊は聖職者の席がある内陣にいて、 $vicars\ choral$, $minor\ canons$, $lay-clerk$, $choristers$ からなり、これが主席司祭（ $dean$ ）側と音楽監督者（ $precentor$ ）側の南北二つに分かれて、応答する形で歌われる。殊に、ローマカトリック教会、ギリシア正教教会、ルター派教会、イギリス国教会において、大聖堂の聖歌隊は、典礼文の一部を歌ったり応誦したりする任務を担い、礼拝にとって必要不可欠になっている。ルター派では、神のことが全ての人々に受け入れられるようにコラール（ $Chorāl$ ）と呼ばれる自国語の賛美歌が創作された。そして、バロック時代には、この旋律を素材にオルガン曲や受難曲の傑作が作曲されている。このドイツ語 $Chorāl$ は、ラテン語 $chorus$ から借入した $Chōr$ （「古代ギリシア悲劇の」合唱歌舞団、聖歌隊」の派生語である。

$choir$ は中英語に借入された時の語形は $quer$ や $quere$ であった。しかし、ラテン語の $chorus$ やフランス語の $chœur$ の影響を受けて、17世紀末ごろから $choir$ と綴られるようになり、19世紀には標準化された。しかし、イギリス国教会の $The\ Proposed\ Book\ of\ Common\ Prayer$ （1928年）などの祈祷書には $quire$ が使われている場合もある。

$chorus$ は、ルネッサンス期の16世紀半ばに、ラテン語からギリシア悲劇の

「コロス」の意味で借入された。シェイクスピアを初めとするエリザベス朝時代演劇や、ミルトンの詩にchorusが登場して、プロローグやエピローグを語ったり、劇中の出来事を解説する役を担っている。例えば、シェイクスピアの*The Life of King Henry the Fifth* (『ヘンリー5世』)では、各幕の初めのプロローグでchorusが登場して、物語の道先案内として説明の役を果たしている。

for the which supply,

Admit me Chorus to this history;

Who prologue-like your humble patience pray,

Gently to hear, kindly to judge, our play. (Prologue)

「その間の事情は私、説明役が解説申し上げます。

皆様に伏してお願いします、どうか心広き友人のように

寛大な目でわれらの芝居をごらんくださいますように。」(小田島雄志訳)

また、ミルトンの劇詩*Samson Agonistes* (『闘義士サムソン』)は、異教の地で囚われの身となっても信仰を守り戦ったサムソンを扱ったもので、ギリシア悲劇の構成をなしており、Chorusが登場する。

17世紀になると、「聖歌隊」とかオペラやオラトリオで歌う「合唱団」の意味が付け加わり、今日的な意味になっていく。古代ギリシア演劇やエリザベス朝演劇などのchorusとか、中世の初めまでの聖歌は、単旋律の形が主流であった。中世の中ごろから多声による合唱曲が生まれ、14世紀にはそれが一般化して15世紀末から16世紀には宗教合唱曲によって合唱音楽が盛んになった。17世紀以後のバロック時代には、合唱は、器楽伴奏つきになり、オペラやオラトリオでは重要な役目を果たすことになった。

chorusの興味深い複合語にdawn chorusがある。この「暁の合唱」というのは「夜明けの小鳥のさえずり」のことであるが、同時に、オーロラなどに関係のある「早朝のラジオの電波障害」を意味する。また、ジャズの用語でstop chorusというのがある。これは、リズムやハーモニーのバックが停止して、ソリストだけが同じテンポを保ったままで演奏を続けることで、stop timeとも呼ばれている。

3. card (n. カード、策、試合) vs. chart (n. 海図、図表)

この二重語の語源はギリシア語の *χάρτης* 「パピルス (の巻物)」で、ラテン語に入り *charta* 「パピルス紙、紙、書」となる。11世紀ごろ、このラテン語からの古フランス語は *charte* 「紙」として取り入れる。しかし、フランス語は、14世紀末に同じラテン語由来のイタリア語 *carta* 「トランプのカード」から *carte* として借入して、17世紀までには *charte* が持つ 「地図、chart, card」にまで意味領域を広げていった。現代のフランス語 *charte* は 「証書、文書、勅許状」や 「憲章」を意味している。パリの *École des chartes* は 「古文書学校」である。一方、フランス語 *carte* は 「トランプのカード」の他に 「地図、証明書、名刺、メニュー」などの意味を持っている。フランス語 *à la carte* は、「メニューの中から好みの注文の」という意味で、英語にも取り入れられている。同じギリシア語起源のイタリア語 *carta*、ドイツ語 *Karte*、ロシア語 *Kartal* は 「地図」の意味を保持している。

英語の **card** は、15世紀初めにフランス語 *carte* から 「トランプのカード」の意味で取り入れられた。その後、様々な意味で用いられるようになったため、現在では *playing-cards* と特定することもある。カードゲームから *card* を用いたいろいろな比喩的な表現が生まれた。*cards and spades* はアメリカの口語で 「(自分の優越を示すために気前よく相手に与える) 有利な条件」であり、*to show one's cards* 「(持ち札を卓上に出して) 手を見せる、計画を公開する、種を明かす」である。*to speak by the card* 「正確に要領よく話す」はシェイクスピアのハムレットが初出である。*to throw up one's cards* は 「持ち札を投げ出す、計画を放棄する、敗北を認める」ことである。

16世紀中ごろから *sure card* が 「目的を達成するための確実な手段」を意味するようになり、*to play one's best card* 「取って置きの手を用いる」や *to have a card up one's sleeve* 「奥の手がある」が生まれる。また、1886年に 「政治的優位のため北アイルランドのプロテスタントの心情に訴える」と言う意味で *to play the Orange card* が用いられてから、*to play ...card* が政治的な意味合いを含むようになったと *OED* は記している。ちなみに、Orange とは反カトリックでプロテスタントと英国王権を擁護するオレンジ党のことである。

20世紀になって、イギリスの口語で 「(雇用者が持っている) 非雇用者に

関する書類」という意味が加わり、to give a person his cards「人を解雇する」、to get one's cards「解雇される」表現が生まれた。

card は15世紀から17世紀頃まで「地図、図表」の意味でも用いられていたが、16世紀後半にchartが借入されてその意味を受け持つことになり、cardのその意味は廃れた。chartは、16世紀後半に「(一般的な)地図」の意味で古フランス語より借入された。17世紀の終わりごろには特殊化によって「海図」の意味を持つようになる。これは、sea-chartの短縮の結果とも考えられる。20世紀になってジャズのコードを書いた「譜面」の意味が加わり、複数形で「(ある特定の時代に最も流行した)レコードや曲のリスト」の意味が生じた。口語でthe chartsと言えば、特にポピュラー音楽の「レコードやCDの週間ベストセラー表」を意味する。また競馬でchart bookは「競走馬の(最近の)成績表」のことである。

4. coffer (n.貴重品箱) vs. coffin (n.棺)

coffer とcoffinの語源はギリシア語κόφινοςであるが、埋葬の意味はなく、単にヤナギで編んだ「籠」であった。cofferは、ラテン語cophinus「籠」と古フランス語confreを経て英語に入る。フランス語のconfreは、「蓋のついた大きな木箱、櫃」の意味でラテン語から12世紀の終わりごろ取り入れるが、13世紀末には「金庫」の意味が加わる。英語はこのフランス語から「お金や貴重品を入れておく頑丈な箱」の意味で14世紀初めに取り入れる。借入当初は「籠」や「櫃」の意味も保持していた。ウィクリフ(Wycliff, 1320?-84)は、キリストがおこなうパンの奇跡の場面(マタイ14章20節)で、5つのパンと2匹の魚を群集に配った残りが「12のかご一杯」になったという箇所、δώδεκα κόφινος πλήρειςというギリシア語を“twelve cofyns ful”(twelve baskets full)と英訳している。

cofferには、14世紀に「ノアの箱舟」「モーゼ(Moses)が置かれていたパピルスの籠」(OED初出c1325)や、「棺」(同c1381)の意味が加わるが、16世紀半ばを最後に廃義となっている。建築用語「格間」としても用いられたが、建築様式の変化とともに古語となっている。土木用語のcofferdamは、橋脚工事などで一時的に周囲を囲って水を締め出す囲いせきの「締切り」のことである。シェイクスピアは長詩*Venus and Adonis*(『ヴィーナスとアド

ニス』)において、“ She lifts the coffer-lids that close his eyes. ”と「まぶた」をcoffer-lidsと表現している。現在は廃語となっているが、廃語にするには惜しい表現である。

coffinは同じラテン語*cophinus*から古フランス語*confre*の北部・北東部方言である*cofin, coffin*「円形で深い籠、箱」を経て、14世紀後半に「籠」の意味で英語に入る。しかし、この意味は17世紀には廃義となる。16世紀前半に意味の特殊化によって「埋葬のために遺体を入れる箱や籠」が生じ、19世紀には航行には適さなくなった「ぼろ船」の意味が加わって現在に至る。「柩」や「ぼろ船」の意味の根底には原義の「容器」があり、特殊化によっていろいろな意味が付け加えられている。例えば、今は余り見ることがなくなったが、魚屋や八百屋などで新聞紙をくるりと捻て円錐形の紙袋にして魚屋や野菜を入れてくれたものである。その円錐形の紙袋を*coffin*と呼ぶ。これは16世紀後半から使われだした意味である。また、15世紀から17世紀ごろまで料理用語として「パイの生地」を指したこともあったが、今は廃義となっている。

*coffin*が埋葬に係わる意味を持つに至ったのは、フランス語の*coffin*が1330年ごろ「棺、柩」の意味で使われた影響であるとOEDは指摘している。ちなみに、現代フランス語*coffin*にはこのような意味はなく、鎌などを研ぐために水を入れた「砥石入れ」の意味で用いられており、*cercueil*が「棺、柩」の意味を担っている。*cercueil*はラテン語*sarcophagus*（文字通りの意味は「肉を食う」）に由来している。小アジアのMysia北西部の古代都市Troyを中心とする地域であった古代トローアド地方では屍が早く腐敗するように棺用として*sarcophagus*「腐食性の石」が用いられた。この語の構成要素から英語の*sarcasm*「皮肉、風刺」と*phagocyte*「食細胞」が生じている

coffin nail は、棺を作る時に用いられる「釘」のことである。18世紀中ごろ、アメリカにおいて俗語で「紙巻タバコ」とか「大のタバコのみ」「命を縮めるもの」を意味するようになる。これはタバコを一本吸うごとに人を棺のなかに追い込むものであるとみなして使われるようになったのである。また、*coffin nail*は同じ発想から「酒のひと飲み（一杯）」を意味することがある。*nail*の代わりに*tack*が用いられることもある。一方、*coffin-dodger*は俗語でタバコをいくら吸っても死なない「ヘビースモーカー」を指す。

coffinは人名としても使われる。Levi Coffin (1789–1877) は、米国のIndianaやCincinnatiで活躍した奴隷制廃止論者で、Underground Railroadを組織して自由州やカナダへ逃亡した奴隷を助け、Harriet B. Stowe作 *Uncle Tom's Cabin*のSimon Hallidayのモデルとなったと言われている。また、1935年にPulitzer賞を受賞した詩人で小説家のRobert Peter Tristram Coffin (1892–1955) がいる。

5. plum (n. スモモ) vs. prune (n. 干しスモモ)

ギリシア語 *πρῶμνον* を語源とする英語の plum と prune は同じ植物の実を意味しているが、plum を乾燥したものを prune と呼んでいる。このギリシア語の起源は定かではないがフリギア語 (Phrygian) 由来ではないかと Klein は指摘している。フリギアはアナトリアの中央高原の西部にあった古代国家である。plum の原産地はコーカサスのあたりではないかと考えられているので、フリギア語起源の可能性がある。ちなみに、古代フリギア人が頭に被っていたものを形どった帽子は、フランス革命当時の革命家や1800年以前のアメリカ人に自由の象徴としてかぶられて liberty cap と呼ばれた。

ギリシア語 *πρῶμνον* がラテン語に入り *prunum* となる。-m- の脱落は異化 (dissimilation) が生じたためである。plum は、アングロ・サクソン人が大陸時代にいた頃に、このラテン語から「プラムの実」や「プラムの木」の意味で古英語に借入された。pr- から pl- への音変化はゲルマン系諸言語だけに見られる現象である。例えば、古低地ドイツ語は **pluma*、古北欧語は *plóma* であるが、それぞれに異形 pr- がある。オランダ語は *pruim* である。-u- [u:] の母音変化は、13世紀頃から x, v, m に続く環境で短母音化する現象が生じ、15世紀に始まり17世紀には確立した [u] の非円唇化に伴い [ʌ] へと変化した。

一方、prune は中世ラテン語 *prūna* から古フランス語 *prune* を経て英語に入る。フランス語 *prunel* は「ブルーネ (干しスモモ)」のみならず生のプラムの実や木を意味する。英語は古フランス語から「干したスモモ」の意味で取り入れた。西洋スモモは乾燥果としての利用が多く、コーカサス地方の隊商の携帯食としてヨーロッパに伝えられた。殊に、南フランスのアジャンで盛んに栽培されて核をつけたまま乾燥された良質のフレンチブルーネは広く愛され需要が多い。

しかし、英語のpruneのイメージは余りいいものとはいえない。「プルーン」の意味の他に、比喩的に口語で「嫌われ者」「無能なまぬけ」を指す。また stewed prunesは、「売春宿」も意味していた。今でもstewedは複数形で「売春地帯」や「スラム街」を意味する。London boroughsの一つである Southwarkにおいては、1546年以前に、公認の売春宿でパン・酒・薪・調理済みの食べ物などを供することを禁じる規制あった。その規制を巧みにすり抜けて、プルーンのシチューは売春宿には付き物であるとして出された。これはプルーンのシチューが性病の予防薬と思い込んだことに起因し、エリザベス朝の売春周旋屋ではこれを看板標識として使っていた。シェイクスピアの*The Merry Wives of Windsor* (『ウィンザーの陽気な女房たち』第1幕第1場) や*Measure for Measure* (『尺には尺を』第2幕第1場) でも出てくる。また、売春婦そのものの呼び名ともなった。例えば、*The First part of King Henry IV* (『ヘンリー四世第一部』) の第3幕第3場におけるFalstaffの台詞の中でstewed prune「売春婦」が使われている。

There's no more faith in thee than in a stewed
prune; nor no more truth in thee than in a drawn
fox;

「お前に真実があるなら女郎の胸にだってある、

お前に誠実があるなら狐の心にだってある」(小田島雄志訳)

ところが、豊穡を象徴するplumには、逆に口語で「一番良いもの」「極めてよい地位」「収入のよい職」などの意味がある。OEDにおけるこの意味での初出は1825年である。例えば、plum-in-the-mouthは口語で「イギリスの上流階級のような話し方の」を意味するし、sugarplumは球形をした「砂糖菓子」であるが「甘言」「賄賂」の意味もある。また、イギリスでは17世紀から19世紀ごろ、plumは「10万ポンド」とか「10万ポンドを持っている人」を指したが、今は余り用いられていない。イギリスのクリスマスには慣例のデザートであるplum puddingは、プラムの代わりに干しブドウを使ったプディングである。やはり干しブドウやりんごなどを刻んで入れたmince pieの一種でplum pieと呼ばれるパイがある。このようにplumは「ケーキやプディングに使う干しブドウ」を指すことがある。

6. pine (n. (古)切望 v. 思い焦がれる、恋い慕う) vs. pain (n. 苦痛、苦惱)

この二重語の語源は、ギリシア語 *ποινή* で、「殺人者が殺された者の親族に支払う代償(金) 身代(金) 償い」とか加害者が被害者あるいはその親族に支払うべきものとしての「罰」の意味がある。古英語の *weregild* にあたる。また、*ποινή* は、肉親間の殺人やその他の自然の法に反する行為に対する復讐あるいは罪の追及の女神である *Erinyes* と同一視され、「復讐の女神」の意味がある。この語がラテン語に入り *poena* となり、ほぼ同じ意味を保持した。

名詞 *pine* は、ゲルマン人へのキリスト教伝播とともに、このラテン語からゲルマン語に取り入れられ、そして古英語に入る。初期の意味は、生前に犯した罪に対する「地獄または煉獄の責苦」、「死後の罰」とか、「肉体的苦痛」で、特にゲッセマネの園や十字架上でのキリストの「受難の苦しみ」を意味していた。しかし、これらの意味は17世紀はじめに衰退した。また、何かを成し遂げようとする時の「苦しみ」をも意味していたが、こちらも17世紀後半に廃義となる。13世紀初めに「精神的苦痛」が生じたが、名詞 *pine* 自体が19世紀中ごろ衰退し廃語となる。そして、肉体的・精神的苦痛は二重語のもう一方の語である *pain* が担うことになる。

動詞 *pine* は名詞からの派生であるが、*OED* によると、動詞の用例が古英語期に見られ、名詞は古英語期末から中英語期にかけての初出となっている。動詞は古英語期には「苦痛で苦しむ」の意味であり、18世紀ごろまでに廃義になる。13世紀末に、飢えや消耗性疾患などでの心身の苦しみで「やせ衰える」の意味が加わり、現在でも用いられている。現代英語では第1義となっている「思い焦がれる、切望する」に関して、*OED* は16世紀末のシェイクスピアの *Romeo and Juliet* (『ロミオとジュリエット』) を初出としている。第5幕第3場において *Friar Laurence* が事の顛末を語る台詞である。

I married them; and their stol'n marriage-day
Was Tybalt's dooms-day, whose untimely death
Banish'd the new-made bridegroom from the city,
For whom, and not for Tybalt, Juliet pined.

「結婚させたのは私です。そのひそやかな婚礼の日が
ティボルトの最後の日、その時ならぬ死が
新郎をこの町より追放させた源、そのために

ジュリエットは悲しみました、ティボルトのためでなく。」(小田島雄志訳)
このpineは「取り戻すことのできないものを切望して消耗する」ことであり、
「強い願望で衰弱する」ことである。

古フランス語が11世紀にラテン語*poena*の意味を保持しつつ*peine*として取り入れ、英語*pain*はこのフランス語から13世紀終わりに犯罪や法律違反に対して課せられる「苦しみや損失」の意味で借入された。したがって、*pain on one's head*は、頭痛ではなく「犯罪に対する罰」で首をはねられることを意味していた。しかし、この句は廃れている。ただし、*pains and penalties*「刑罰」や、*on [under] pain of ...*「違反すれば...の刑罰に処するとして」「...の制裁される条件で」という句には初期の意味が保持されている。13世紀の終わりから14世紀にかけて精神的・肉体的に傷を受けて感じる「苦しみ」の意味が加わる。初めは罰として課せられる「苦しみ」を指していたが、一般化された「苦しみ」になったものである。さらに、特殊化によって「肉体的な苦痛」「陣痛の苦しみ(現在では複数形で)」や、「精神的苦しみ」「悲しみ」を意味するようになる。同じ時期に「何かを成し遂げるための苦勞、努力」の意味が加わり、何かをしようと「骨折っている」の意味の*to take pains*や*to be at (the) pains*, また*for (one's) pains*「骨折り賃に」「骨折りがいもなく」、*spare no pains*「骨を惜みせず...をする」などの句が生まれた。

7. **priest** (n. 聖職者、司祭) vs. **presbyter** (n. 長老、(監督教会の)司祭)

*priest*と*presbyter*の語源は、ギリシア語*πρέσβυς*「年上の(者)」の比較級形である*πρεσβύτερος*「年長の、長老」である。Barnhartは、このギリシア語は*πρῆσ*「前の」と*βός*「牛」から成る複合語で、もともとの意味は「家畜を牧する者」であり、この複合語はサンスクリット語にも見出せ「群れの長」を意味していると、指摘している。新約聖書で用いられているギリシア語*πρεσβύτερος*が後期ラテン語に*presbyter*「長老、司祭、聖職者」として取り入れられた。2世紀ごろの初期キリスト教会では、礼拝の集会は*bishops*, *presbyters*, *decons*によって執り行われていた。*bishop*の仕事が増大するにしたがって、一部秘蹟を執り行う任務などの多くの仕事を*presbyter*にゆだねていた。

ラテン語訳のヴルガタ聖書では*πρεσβύτερος*は*senior*, *seniores*と翻訳され

ているが、例外的に*presbyter*が、『使徒行録』14章23節「各教会に長老を立て...」と15章2節「使徒と長老たちに尋ねた...」『テモテへの前の手紙』5章17節「よく支配する長老たちは、二重の誉れを受けるねうちがある。」19節「二人か三人の承認がなければ、長老にたいする訴えを受けるな」、『ティトへの手紙』1章5節「すべての町に長老を立てさせるためであった」、『ヤコブの手紙』5章14節「あなたたちのうちに病気の人があるなら、その人は教会の長老たちを呼べ」において用いられている。16世紀から17世紀にかけてギリシア語から英語に翻訳された聖書は基本的にはelder(s)と訳されている。しかし、欽定訳聖書の『ティモテオへの前の手紙』第4章第14節(第15節)においては*presbyter*が用いられ、レーンズ新約聖書ではヴルガタ聖書で*presbyter*と訳された箇所は*priest*が用いられている。

*priest*は、古英語期に、ラテン語*presbyter*から俗ラテン語 *prester*を経て、*prēost*「キリスト教の司祭」で借入された。中英語では、*prēost*は*preist*と綴られるようになり、16世紀には*priest*となった。ラテン語においては、*sacerdos*がギリシア語 *ἱερεύς*「神官、司祭」に対応する語として、神々に生贄を捧げる「神官、司祭」の意味で用いられていた。聖書の翻訳において「ユダヤ教の司祭」の意味で使われ、やがて「キリスト教の司祭」にまで意味が広がり*presbyter*と同じ意味を持つようになっていた。この*sacerdos*が古英語に*sacerd*として取り入れられ、異教ないしはユダヤ教の司祭を指す語となっていた。しかし、古英語期末には、使われなくなり*priest*が*sacerd*の意味も吸収することになった。しかし、今でも*sacerdocy*「司祭職、聖職者の職務」、*sacerdotalism*「祭司主義(神と人との仲立ちとしての祭司の権能を重視する)」などの語は残っている。ちなみに、ラテン語*sacerdos*の語幹からは、英語の*sacred*「神聖な」や *sacrifice*「犠牲」などが派生している。

英語の*presbyter*は、16世紀にラテン語*presbyter*から「キリスト教会の長老」の意味で教会の地位階級を表す公式語として借入された。カルヴァン主義に基づいて長老が支配する長老派教会(Presbyterian Churches)では、俗人である長老の発言権が重視されたためこの名称がついた。長老派教会では司祭は*minister*(of religion)と呼ばれている。長老派教会は16世紀にJohn Calvinによってジュネーブの教会において始まり、その後オランダやスコットランドに広がり、アメリカの中西部から南部にかけて強い影響力を保っている。